

第2回 大和御所道路（橿原北IC～橿原高田IC）植栽検討委員会
議事概要

1 日 時 令和3年6月24日（木） 10：30～12：30

2 場 所 奈良国道事務所 4階会議室

3 出席者

委員長	京都女子大学 宗教・文化研究所 客員研究員	榎村 久子
	ヴィジュアルデザイナー	岩井 珠恵
	奈良県立大学 教授	井原 縁
	橿原市 まちづくり部 部長	近藤 浩明
	近畿地方整備局 奈良国道事務所 副所長	宮井 達也

欠 席

奈良県 県土マネジメント部 道路建設課 課長	六車 憲雄
奈良県 水循環・森林・景観環境部 環境政策課 課長	大東 宏幸

4 議 事

1) 植栽検討委員会規約の変更点について

・了承されました。

2) 資料1_第1回植栽検討委員会の振り返り（意見の確認）、資料2_植栽可能区域の説明について

- ・道路植栽は、道路に彩りを持たせる、人が楽しむといった人間主体の考え方がある一方で、生態系の観点からも重要な役割を果たしていると考えられるため、そうした観点も踏まえて、最善の方向性を見出したい。
- ・樹木の中には生態系に被害を及ぼす恐れのある樹種もあり、現況植栽帯にもそうした樹種がみられるため、樹種選定においても、配慮が必要である。

3) 資料3_ワークショップ結果の報告について

- ・沿道土地利用の大半は住宅系であるが、その中でも、敷地が道路に近く、整備後には、道路沿いに面する区間が何箇所もある。こうした箇所では、現況植栽帯に対して騒音や排気ガスの緩和等の効果を感じている人が多いと思われる。整備後に樹木が少なくなることによる環境の変化を大きく感じると考えられるため、丁寧に検討していく必要がある。

3) 資料4_植栽の理想像（基本理念(案)、基本的考え方(案)）について

- ・基本理念は、事務局案のような直接的な表現ではなく、歌の歌詞になるようなスマートな表現がよい。
- ・基本理念の前段にある「歴代の皇居が営まれ」という表現は、「都が置かれた」等の表現に改めた方がよい。

- 昔、飛鳥京、藤原京、平城京を結ぶ上ツ道、中ツ道、下ツ道という南北の大きな道路があったが、大和御所道路は、その現代版とも言える重要な道路だと考えている。そのため、基本理念の説明においては、対象区間のことだけでなく、全体を踏まえた上での対象区間の検討であることを表現した方がよい。
- 現況植栽帯は、潜在自然植生を中心に奈良の気候風土に即した土地本来の緑を重ねて植えていたため、奈良らしさが表現されていたが、整備後は、植栽基盤が大きく変わるため、同様の考え方で奈良らしさを表現するのは難しいと考える。また、潜在自然植生のみで四季の変化を表現することも難しい。四季の変化は低木、中木類で演出し、奈良らしい樹木は高木で存在感を効かせる等、奈良らしい樹種と四季の変化を与える樹種のバランスをどう考えるかが重要である。
- 一定間隔で列植する植栽デザインは、古いデザインになりつつある。対象区間は、植栽基盤の制約から、列植が難しいこともあるため、規則的ではない、連続しないつくり方を考えるとよい。一方で、現況植栽の緑の壁は、沿道住民にやすらぎ感を与えているため、それが大きく変わることに対してどう考えるかは悩ましい。高木が可能な場所には高木を植え、高木が困難な場所は低木でいくといったフレキシブルな考え方が必要である。
- 騒音に対して、樹木は心理的な効果であり、築堤構造が騒音抑制に対する物理的な効果を担っているため、整備後もこの築堤構造を残すことが望ましい。築堤構造は、大型トラックのタイヤが見えない高さが理想であるため、そこまでの築堤や石積み擁壁のようなものを設けるとよい。
- 常緑樹の中にも花の咲く木はたくさんあり、花の咲く時期も異なるため、常緑樹でも四季の変化を表現することは可能である。
- 「四季の変化を感じられる空間」は、「地域住民の生活の質を高めるみどりの創出」に包括できると考えられる。
- 様々な制約がある対象区間の中で、現況植栽のような統一感を持った植栽帯を整備することは難しいと考えられるため、「道路構造に応じた緑化デザイン」にとどめておく方がよい。
- 基本的な考え方にこの場所の風景の部分的な継承といった要素が必要と考える。
- 路線全体の統一感について、対象区間のイメージツリーのような高木種を決め、高木が植えられる場所を取り入れながら、低木しか植えられない場所でも起終点等でポイントとして植えることで、全体としてゆるやかな統一感を感じられるやり方も考えられる。
- 対象区間は、地域住民との関わりの中で整備されている経緯もあり、地域住民の声が重要であるのは確かであるが、これだけの大きな道路の場合、地域住民だけでなく、車で走るドライバーのための道路空間の質という視点も非常に重要である。
- 京奈和自動車道の整備に向けて景観計画を策定した際に、道路からのドライバーの視点を非常に重要視していた。この道路を考える上では、必ずドライバーの視点が必要と考える。対象区間は、大和三山が見えてくる、非常に大和らしい景観となるため、今の緑の壁がなくなることで、外の景観が見えるようになることは喜ばしいことでもある。それほど、道路からの景観は重要と考える。
- 実際に車で走った際に、緑の壁がきれいと感じる一方で、外が全く見えないと感じた。この道路は、地域の方々との話合いの中で出来た意味合いが強いが、今後、未来に向けては、違う要素を入れる方がよいと考える。

5) 資料5_アンケート実施方針(案)について

- ・地域住民は、植栽帯を道路に対してほぼ直角方向に見ているため、整備後の植栽帯のイメージを示すパースについても、地域住民が普段から見ているような角度で作成した方がよい。
- ・高木がやや密に植わるイメージは、唐突に高い樹木が現れるのではなく、中木から高木につながる自然なかたまりのイメージを表現する方がよい。
- ・交差点付近のイメージ図は、選択肢に「四季の変化が感じられる落葉樹主体」と「一年を通して緑が感じられる常緑樹主体」と記載されているが、常緑種にも四季を感じられる花の咲く種もあるため、「落葉主体」等の表現を用いるべきではない。また、写真のイメージだけで、質問の意図をくみ取ることが難しいため、写真を変更すべきである。
- ・ツツジ、ツバキ、サザンカ等、常緑種の中にも美しい花を長期間見せてくれる種もある。『万葉集』にうたわれる種の中にもそういった樹種があるため、「花木や四季を感じられる種」イコール「落葉樹」と誤解を与える表現は避けるべきである。
- ・交差点付近のイメージ図は、都会的なイメージであるため、現地に近いイメージに変えた方がよい。

6) 資料6_地域とのつながりの継承に向けた検討案について

- ・ワークショップの場や付近の小学校で意見を聞きながら、地域が望む形にしてほしい。
- ・市民花壇を整備するのであれば、管理し続ける必要がある。整備当初はきれいであったが、途中で管理されなくなっているところも多くみられる。市民花壇は、地域の人々の協力が不可欠であるため、実際に協力を得られることが大前提である。
- ・密植され絡み合う樹木の中で、健全な樹木を移植できるのか等、物理的な問題はあると思うが、できるだけ実現可能なやり方で、丁寧に住民の方々の意見を聞きながら移植を検討していく必要がある。

以上